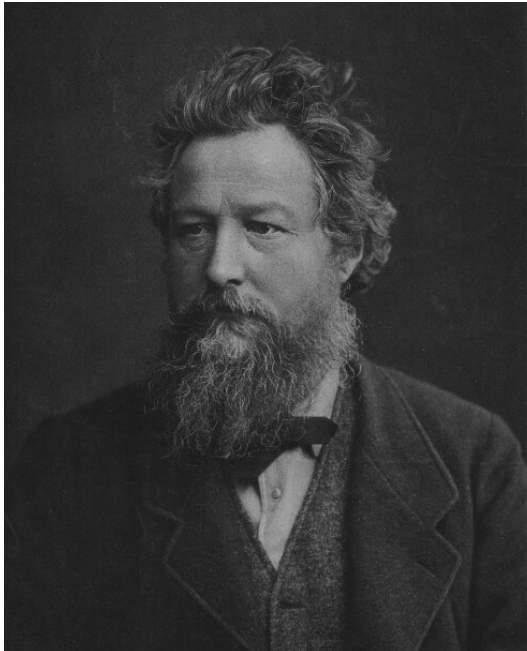


英国の社会主義

ハインドマン率いる社会民主連盟、W. モリス、E. B. バックスの社会主義者連盟

基督教友愛新聞

発行所：
白十字キリスト教
社会主義研究会
(<http://www.ichtus.net/css>)
発行人：
倉井 香茅哉 (独立系研究者)



写真：ウィリアム・モリスの肖像
(c) National Portrait Gallery, London

英国における一八八〇年代は転換の時代であった。大不況、諸外国との貿易競争、アイルランド人の自治要求、社会主義の復活は、中産階級の人々に大きな圧力として受け止められた。このような時代背景の下、今回は、政治家のヘンリー・メイヤーズ・ハインドマン、作家・工芸家のウィリアム・モリス、法廷弁護士のアーンレスト・ベルフォート・バックス（英国最初のマルクス主義紹介者）らを中心に、イギリス・マルクス主義の第一世代を紹介したい。若きカール・マルクスとフリードリヒ・エンゲルスは、一八四〇年代英

議会政治による漸進的社会改良か、労働の喜び―中世ギルドの復権か。

一八八四年の終わり、ハインドマンの権威主義的な組織運営に対する反発から、モリスやバックスらが社会民主連

た。一八八一年、英国初の社会主義政党である民主連盟 (the Democratic Federation) が H. M. ハインドマンによつて設立された。一八八二年六月に E. B. バックスが参加、半年後の一八八三年一月にウィリアム・モリスが参加している。一八八四年、社会主義的な傾向を打ち出すために社会民主連盟 (the Social Democratic Federation) へと改称、週刊の機関誌『ジャスティス (正義)』(Justice) が刊行された。

How I Became A Christian Socialist

二つの「余は如何にして～」を軸として
英国キリスト教社会主義と内村鑑三
さらに自己の信仰の目覚めを語る機会!!

九月一七日、第一五回を通じて、内村鑑三は英聖書と内村鑑三に学ぶ国キリスト教社会主義会にて、「僕は如何にしてキリスト教社会主義者となりしか」と題する発表の中で、オスカ・ワイルドの短編小説『幸福な王子』に言及した。この小説を最初に知ったのは三歳の頃である。僕はワイルドによつてキリスト教信仰に導かれた。いわば、文字上社会主義者となりし乎』という文章を発表して別個の問題として考えていた文学、信仰、社会福祉といった領域が、一つに結びつけられた。まさに新生の体験である。

刊、当初は月刊であったが、一八八六年五月から週刊となった。同紙の目的は「社会主義の普及」とされ、モリスとバックスの協働作業による論文「社会主義——その根源から」が連載された。モリス、バックス、マルクスの娘エリノアらが

盟を脱退し、新たに社会主義者連盟 (the Socialist League) が結成された。一八八五年二月にはモリスを編集長として機関誌『コモンウェール』を創刊、当初は月刊であったが、一八八六年五月から週刊となった。同紙の目的は「社会主義の普及」とされ、モリスとバックスの協働作業による論文「社会主義——その根源から」が連載された。モリス、バックス、マルクスの娘エリノアらが

力であると考えた。また、モリスにとつての社会主義の実現は、ハインドマンのように選挙の行使や代議制の発展によつてではなく、かつてのパリ・コムューン型の政権奪取の方法が想定されていた。ウィリアム・モリスの社会主義は、現代でいうマルクス・レーニン主義とは異なり、エンゲルスからは「ユートピア社会主義」として敬遠された(とはいえ、両者が真摯な応答を交わしていたことも事実である)。

【参考文献】
(一) 安川悦子『イギリス労働運動と社会主義「社会主義の復活」とその時代の思想的探究』(御茶の水書房、一九九三年四月)
(二) ウィリアム・モリス E. B. バックス/大内秀明(監修) 川端康雄(監訳)『社会主義 その成長と帰結』(晶文社、二〇一四年二月)
(三) 川端康雄『ウィリアム・モリスの遺したもの デザイン・社会主義・手しごと・文学』(岩波書店、二〇一六年二月)

天帳院日記

幼い頃から、「自分は世界に居場所のない人間だ」と感じていた。教室で喋ることのできない症状を三歳から一八歳まで引き摺った。現在でいう場面緘黙症(不安障害、情緒障害)である。また、皮膚が過敏であったから、たびたび身体中に湿疹を生じた。穢れた存在として排除される絶望は、おそらく、実際に体験した者にしかわからない。家族、教師、同級生、誰にも充分に理解されることはなかった。オスカ・ワイルドの『幸福な王子』は、そんな幼少期の体験に深く刺さった。自分は醜い姿になりながら、街の貧しい人々に宝石や金箔を与える王子の像に自己を重ねた。勿論、そこにあるのは反転したナルシズムである。とはいえ、「いつか、天国へ上げられる」という確信の外に、救いの希望はなかった。それが、神と向き合い、単独者として生きる人生の原点である。

告知

無教会全国集会 2017

倉井香矛哉（発題＋分科会）

無教会と若者

日時：2017 年 10 月 29 日（日）（2 日目）

会場：山崎製パン企業年金基金会館サンシティ

（〒272-0034 千葉県市川市市川 1 丁目 3-14）

主催：無教会全国集会準備委員会